HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	黄氏鳳姿の誕生 ： 池田敏雄との関わり
Author(s)	劉, 淑如
Citation	国語国文研究, 135, 17-28
Issue Date	2009-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93278
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_135-17-28.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

黄氏鳳姿の誕生
——池田敏雄との関わり

劉　淑如

はじめに

日本統治時代の台湾において、萬華を舞台に台湾の民俗慣習や伝説を描いた文学少女がいた。その名は黄氏鳳姿（一九二八～）という。[1] 台湾の文学少女黄氏鳳姿の誕生は、鳳姿の曾祖父の伝統風習や昔話などについての素養や知識の豊富さ、日本語の学習につながる母の日本語の書物の提供、黄家の旧来の伝統行事への頑なな遵守によるところが大きかった。また、鳳姿の物語世界の主要な舞台たる、鳳姿が育った萬華とその周辺の大稲埕や龍山寺一帯が日本人が集まった城内とは対照的で、文化から商業、宗教信仰、物産、生活様式に至るまですべてがきわめて「台湾的」であることも、文学少女鳳姿を生み出したことと密接なつながりがある。もっとも、文学少女としての鳳姿の誕生は、鳳姿を見出した池田敏雄（一九一六～一九八一）に負うところが最も大きかったといえる。

鳳姿は公学校（日本植民地下の台湾における独特な初等教育機構。主に台湾人生徒を受け入れる。）四年生の作文の時間に「おだんご」を書いたことで、クラスの受け持ちの池田敏雄に注目される。その後、池田の紹介を通して、鳳姿は作家・製本家・雑誌の経営者西川満と知り合った。やがて、「おだんご」は教室のなかの作文から活字化され、西川満経営の雑誌に載せられ、また、「おだんご」をはじめとする台湾の年間行事や伝説のアンソロジー『七娘媽生』は西川満経営の日孝山房より刊行された。これによって鳳姿は無名の公学校の生徒から一躍台湾全島に知られる文学少女となり、さらに第二作文集『七爺八爺』の出版と第三作文集『台湾の少女』の相次ぐ出版につれ、鳳姿の名は「内地」たる日本にも広がっていき、「台湾の豊田正子」[2]とまでたとえられた。

池田敏雄が戦前に携わった台湾民俗の研究が、台湾人に貴重な文化資産を残したとして、戦後「日本人の良心」「ヒューマニズム」といった観点から評価されることになるのだが、はたしてこういった

一面的な見方で池田の台湾民俗学を評価するのは妥当なのだろうか。こういった疑問をふまえつつ、本稿では池田敏雄の台湾民俗学と深く結びついている黄氏鳳姿の台湾文壇へのデビューの背景を、池田敏雄とのかかわりを中心に明らかにしていく。

一、作文の時間——公学校の教師池田敏雄との出会い

先述したように、黄氏鳳姿の台湾文壇へのデビューのきっかけは、一九三八年一一月、彼女が台北市龍山公学校に四年生として在籍した時、三年生以来の担任の池田敏雄が生徒に出した、「自分のくらしについて」という作文＝綴方の宿題に書いた「おだんご」と題した作文にさかのぼることができる。黄氏鳳姿の回想[3]にも示唆されているように、池田敏雄が「おだんご」に惹かれたのは、その頃、池田は台湾日日新報社が子供向けに発行する『国語新聞』の編集に関与し、また台湾の民謡や民話の採集を手掛けていたことと大きくかかわる。

まずは、「おだんご」の一部を見ておこう。

> 臺灣では冬至(トウジ)の日を冬至節(タンチイツエ)といつてお祭りをします。（中略）前の晩はどこの家でも賑やかに冬至圓(タンチイイン)をこしらへます。私の家もこしらへました。
>
> 手をきれいに洗つて、大きなざるのそばに集まりました。私も妹も、うれしくてうれしくてたまりません。（中略）おだんごが出來上ると、明日の朝神樣や御先祖にお供へするのです。そしてそれがすむと戸や窓や机、椅子などに「一年間ご苦勞さんでした。」と一つづつくつつけてお祈りするのが、昔からの習慣です。私はおだんごは好きではありませんが、こしらへる時が一番たのしいのです。みんな面白く夢中になつてまるめてゐると、お母さんが、
>
> 「不思議なことを話しませうか、お嫁に行つた人がね、どんなにめちやめちやにおだんごを茶碗の中に入れてもかならず偶數(ぐうすう)になるつて、そしてね、まだお嫁に行かない娘さんが茶碗に一ぱい入れるときつと奇數(き)になるさうですよ。」
>
> とおつしやいました。妹は不思議がつて、
>
> 「それは本當。」
>
> 「さあ。」
>
> とお母さんが言ひ續けようとした時、私は、
>
> 「明日ためして見たらわかるんでないの、秀煌(しうくわう)ちやんうるさいね。」
>
> と言ひました。お母さんは、
>
> 「さうよ。明日ためして見ればわかります。」
>
> とおつしやいました。妹はくやしがつて、
>
> 「姉さんはおだんごをまるめる時に一つづつするね。私だつたら一度に二つも三つも出來るよ。」
>
> と言つてじまんしました。私は、
>
> 「ではやつてごらん。」
>
> 妹はだまつて三つ手のひらにのせて、ぐるぐるまるめました。

するとおだんごがくつついてお母さんに叱られました。(4)

かくして「おだんご」は、台湾の冬至の日の鳳姿と家族とのやりとりを台湾の民俗慣習を織り込みながら描いた、暖かい家庭的雰囲気の漂う、ユーモラスな小品である。このような作品がその頃、台湾の民謡や民俗の採集に取り組んでいた池田を驚かせ感動させたことは、なんら不思議ではあるまい。また、「国語」教育の立場に立てば、「国語」教育を受けてから四年にまで達していない鳳姿の流暢な「国語」による「おだんご」が、日本統治下の台湾における、台湾人の「国語」力を養成する拠点の役割を果たしていた初等教育機構「公学校」の学級の先生としての池田の注目を集めたのも道理であろう。

とりわけ当時、池田は『国語新聞』の編集に取り組んでおり、学校という枠組みを越え、校外の「国語」普及の推進にも関与した。なお、鳳姿が池田に見出された時点では、日本内地にはすでに豊田正子という綴方少女がいて、その作文集『綴方教室』が一九三七年八月に中央公論社より刊行されてから一九三八年一〇月にいたるまで五一版が重版されたほど日本でもてはやされた。また、その映画(東宝映画／山本嘉次郎監督／森田信義製作／徳川夢声・高峰秀子主演)は、一九三八年九・一〇月中に台湾で上映されており、(5)池田は鳳姿を含め、クラスの全員をつれていって、映画館でこの映画を見ているのである。(6)

かくして鳳姿の文壇デビューは池田の「国語」普及運動との関与と関係し、また池田の台湾民俗への関心とも深くかかわっているのだが、以上のような二つの側面から鳳姿のデビューの背景を論じる前に、まず鳳姿とのかかわりに沿いつつ、池田敏雄の生い立ちと台湾時代の経歴を辿っておこう。

二、池田敏雄の生い立ちと台湾時代の経歴

池田敏雄は父朝、母すてのはじめての子として、島根県簸川荘原村に生まれた。父は旧姓山崎、池田家の養子である。母方の祖父は漢学の素養をもつ人で、池田敏雄はこの祖父にかわいがられ、その影響下に育った。一九二四年、池田が八歳の時、父は定職についておらず、また周囲のすすめもあったため、一家は、遠縁の持田家を頼って台湾に渡った。同年、池田敏雄は台北市旭小学校(日本人が主である)二年に編入、一九二九年三月、旭小学校を卒業、四月、台北第一師範学校に進学した。(7)台北第一師範学校在学中の池田は、同人誌『原生林』(原生林社、一九三五～一九四五年)を発行し、短歌を詠む文芸青年であった。(8)後年、西川満との交際は、短歌を通じて始まったと言われる。なお、この頃、池田は柳田国男の民俗学に接触しはじめる。

一九三五年三月、池田は台北第一師範学校を卒業し、四月、台北市龍山公学校に勤務。一九三七年四月、龍山公学校三年を担任し、クラスには、黄氏鳳姿がいた。一九三九年二月、西川満経営の日孝山房より出された台湾民俗の研究誌『台湾風土記』の編集を手伝う。創刊号に鳳姿の「おだんご」が掲載され、また彼の台湾民俗についての最初の文章「台湾挑燈考」も載せられた。この頃、池田は『日本読書新聞』『台湾日日新報』などに多数の書評を執筆しながら、鳳

姿の母を通じて、台湾の習俗や民話などを採集するようになり、さらにこの黄家との接触を中心に、次第に民俗採集を萬華一帯や大稲埕にまで広げていった。

一九四〇年一月、西川満は台湾文芸家協会を組織し、機関誌『文芸台湾』を創刊した。池田は台湾文芸家協会の前身である台湾詩人協会以来の会員として編集を助ける。二月、黄氏鳳姿の最初の個人文集『七娘媽生』を編集し、西川満経営の日孝山房より刊行した。三月、義務年限の五年を終え、龍山公学校を辞職し、四月、台湾総督府情報部囑託となり、編集事務を担当した。同時に、鳳姿の『七娘媽生』（東都書籍台北支店より再版）と『七爺八爺』ならびに「台湾に於ける文学書目」（西川満編集発行の台湾文芸雑誌『愛書』第一四輯に所収、黄得時と共同編集、一九四一年五月）の編集を手掛け、また萬華一帯での民俗採集をも続けていた。[9] 鳳姿によれば、この頃、池田は雑誌をやりたいという気持ちを、民俗採集の相手にもらしたと言う。[10]

池田のこの発想は、やがて一九四一年七月、台湾民俗の研究誌『民俗台湾』（全四二号、一九四一年七月～一九四四年一二月、東都書籍株式会社台北支店）の発刊へと実現されていったが、『民俗台湾』の構想が実現されたのは、東都書籍株式会社台北支店責任者であった持田辰郎に負うところが大きい。持田は池田の同郷で、しかも遠縁にあたる人であった。それに、東都には編集の経験のある社員がいなかったので、池田はアルバイトで編集を手伝った。というわけで、池田が『民俗台湾』の計画を持ち掛けると、持田は面倒を見ると快諾した。[11] ちなみに、東都書籍株式会社台北支店は東京の三省堂の傍系会社であり、その出版物も台湾と南洋に向けたものが多かった。

池田が台湾時代に執筆している台湾民俗関係の文章は、西川満主宰の雑誌『華麗島』（台湾詩人協会、一九三九年一二月）や『台湾風土記』、『文芸台湾』のほか、彼の企画・編集の『民俗台湾』や『台湾公論』や『台湾時報』などに散見でき、また西川満との共著『華麗島民話集』（日孝山房、一九四二年五月）と西川満編『台湾文学集』（東京大阪屋号書店、一九四二年八月）にも見られるが、それらを集大成したものが一九四四年八月、東都書籍株式会社台北支店より刊行された『台湾の家庭生活』である。なお、この前年の一九四三年八月、黄氏鳳姿の第三の文集『台湾の少女』を編集し、東都書籍株式会社東京本社より発行した（台湾でも一九四四年三月、東都書籍台北支店より再版された）。

以上、鳳姿とのかかわりに沿いつつ、池田の台湾時代と経歴をごく簡単に振り返ってみたが、ここでは次のことが指摘されよう。まず、池田は「湾生」（戦前、幼年期を台湾で過ごし、台湾に定着した在台日本人二世のこと）として台湾で育ちながらも、公学校に勤務することがきっかけで、台湾人との本格的な接触ができ、それが鳳姿のデビューに直接的につながる。鳳姿によれば、当時、台湾在留の日本人家庭の多くがそうであったように、池田の家も「台湾の文化や人々の暮しに対する特別な関心や知識を持つことなく、郷里に居た時のままの生活様式を続けていた。お手伝いに頼んだり、勤め先で接触したりというつきあい方で」[12] あった。

一方、池田が文芸青年として、台湾文芸界の作家兼製本家、出版社の経営者の西川満と交際し、また日本の出版社の台湾における支

社の責任者持田辰郎と縁が深いことも鳳姿のデビューにつながる（鳳姿の第一冊目の文集『七娘媽生』の初版は西川満経営の日孝山房によるものだが、その再版は東都書籍台北支店によるものである）。もちろん、鳳姿のデビューにとっては、池田の台湾の民俗への興味もきわめて肝心ではあるが、一面、池田が台北第一師範学校在学中から柳田国男の民俗学と接触しはじめるという面をも見逃しえない。つまり、後にも触れるように、池田の台湾での民俗の採集の展開は、柳田国男からの影響が甚大なのである。

それを論じる前に、まず池田が深く関与し、また鳳姿の台湾文壇デビューとも密接に関わっている、戦前の台湾における「国語」普及運動の一環とされた公学校の綴方教育について見てみよう。

三、公学校の綴方教育

池田が綴方に関心をもったのは、当時、「国語」教育を中核とする公学校の綴方教授にたいする要請からであった。

日本統治期間の台湾における公学校の綴方指導・教授のありさまを示す手がかりのひとつに、一九二四年一〇月、台南師範学校附属公学校より刊行した『公学校教育の第一歩』のなかの一章「綴方教授要義」がある。この章では、綴方教授の目的、教材、方法などについて論じられているが、そのなかの目的論の項で、綴方の定義について述べるところによれば、「自己を通しての宇宙の現象を如実に現はしたもの、即ち自己の生活を如実に現はしたものが文章であり、この文章を作製することが綴方である」とある。また綴方教授の目的について、「表はされる所の生活の指導と、現はす所の表現の指導と云ふ事になる」とあり、しかも表現と生活、「この両方面の指導は同時に行はねばならぬもので、決して単独に行つてはならないのである。その上常に児童の生活に即して行はねばならない」とある。ここには、「生活綴方」という概念がうかがわれるのだが、このような綴方教授の方針は、台湾公学校規則第二五条に「国語」科の要旨として次のように明文化されていることからも示されているように、台南師範学校附属公学校一校のみならず、当時、全公学校的スケールで定められていたものではある。

> 国語ハ普通ノ言語文章ヲ知ラシメ、正確ニ思想ヲ発表スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓発シ特ニ国民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス。[13]

ここでとりわけ注意に値するのは、公学校の台湾人生徒にたいする、表現と生活の両方面の指導の眼目、あるいは目的とするところは、生徒たちの日本の「国民精神の涵養」にある、ということである。その指導の原理を具体的に言うと、つまり、「文章が自己の生活を如実に表はしたものであるから、彼等の文章を透して彼等児童の生活に触れる機会が多からう」。「殊に公学校児童の家庭生活は、言語、風俗、習慣等」、日本「本来の生活のそれ等とは、著しい間隔がある。従つて児童の徳性殊に国民精神に缺陥のある事は云ふ迄もない。それで、この良い機会を捕へて徳性の涵養殊に国民性の陶冶に力を注がなければならない」[14]、というものなのである。ここで明らか

なように、公学校における綴方教育には、同化主義の影が落とされているが、こうした同化主義を骨子とする「生活綴方」は鳳姿が池田によって見出された一九三〇年代後半になってもなんらかわりがないように見えることは、次に紹介するいくつかの刊行物にもうかがわれる。

まず、一九三五年一月、台湾総督府文教局学務課・台湾教育会学校教育部によって共同発行された『小公学校ニ於ケル国民精神涵養徹底ニ関スル具体的施設』という印刷物があげられる。同書には、教師、各教科目、訓育、卒業生などの事項が記載されているが、「国語」科については、「話シ方、綴リ方ニ於テ国民精神涵養ニ関スル教材の重視」とある。なお、一九三八年一月、台北州松山公学校発行の『綴り方科教授細目』の「序」にも、「綴方教育の究極の目的は文を通して人格の陶冶をはかり真の日本精神をもつ皇国民を養成することであると思ふ。故に児童の作品を調査し添削するの労を惜しまず常に彼等の生活全般の指導をなして人格の向上につとめ、本科の目的達成を期したいものである」とある。

さらには、一九四〇年一一月、台北第二師範学校附属公学校啓明会著、台湾子供世界社発行の『公学校綴方教授細目』でも、綴方の目的は日本国民になりきるための必須の通過段階としての「国語生活者」へと換骨奪胎することにあると強調されている。そして国語生活者への錬成をめざして進む綴方教育としてもっとも重視すべき点として、第一に、国民教育という見地からは、従来の、児童の生活そのままを表現させるという綴方教育観より以上に児童の目を啓き、心情を培うこと。第二に、「国語」力の充実練磨という視点から、形式と思想感情の両面から鍛錬させ、「国語」の慣習に合う正しい文章表現に慣れさせることである。

以上のように、公学校における綴方教授は、生徒たちの実生活と結び付けるという方向へと向かった。このような「生活に即した」綴方教授は生徒たちに台湾人としての「あるがままの生活」を活写させることによって、台湾人の皇国民錬成という目的を完遂（問題解決）させようとしたものであるがゆえに、思想的にはやはり日本本土における生活綴方運動の流れを汲みいれたものとみなしうる。つまり、日本のプラグマティズムとしての生活綴方運動も[15]、台湾の公学校におけるコロニアリズムとしての綴方教授の基盤を提供したといえるのである。その根拠はとりもなおさずさきに触れた公学校における綴方教授の指導原理にある。そしてそういった指導原理からは、「地方化、実際化につとめる」や「学習書の文も大いに郷土化に努めて採用したものが多い」や「指導の題目は郷土の風物、行事を考慮して配列した[16]」というふうに、地方化や郷土化を積極的に公学校の綴方にまで持ち込む意図がうかがえる。

この意味で、「アメリカのプラグマティズムが〔形而上学的迷路に思想が入るのをふせぐためにつくられた〕防御的プラグマティズムであるのにたいして、（日本の―引用者注）生活綴り方運動は、〔生活改善に目をむけさせる〕攻撃的プラグマティズムとなった[17]」のである。さらに公学校における生活綴方運動の眼目は、同化と表裏一体の関係にある、異文化としての台湾文化の日本式への修正にあるがゆえに、その「攻撃的プラグマティズム」は、日本のそれ以上に強いと言わねばならない。

かくして公学校における綴方運動は、日本本土の生活綴方運動と連動しながらも、台湾という、コロニーとしての場所からくる特殊性によって、日本本土のそれよりも重要な意味をもっているのである。公学校をはじめとする台湾における教育現場での文集製作の動向は、被植民者の台湾人にたいする「国語」教育の成果のディスプレーという政治的営為と、かなり密接なかかわりがあると言わねばならない。公学校の教師としての池田敏雄が生徒の鳳姿の作品の文集作りに踏み切った背景を論じる際に、そして台湾の文学少女黄氏鳳姿の誕生の要素を追究する際に、こういった側面も見逃してはならない。

四、池田敏雄の文集作り

池田敏雄が鳳姿の作品の文集作りに踏み切ったのは、鳳姿の「おだんご」に出会ってから間もない一九三九年二月前後のことと思われる。鳳姿によると、池田は「おだんご」は面白く書けているというので、西川満主宰の雑誌『台湾風土記』（創刊号、日孝山房、一九三九年二月）に載せてもらった。それがもとで、池田は「台湾の習慣を綴方にしてごらん、さうして、それを本にまとめよう」[18]と彼女に言った。池田の年譜によると、彼は一九四〇年三月、義務年限の五年を終え、龍山公学校を辞職した[19]。以来、後述するように、彼の台湾時代は、ほとんど台湾民俗の研究の方へと傾いていった。五年間の公学校教師としての成果のひとつのマイルストーンとする、といった気持ちが池田にあったのだろう。特に鳳姿の第一冊目の個人文集『七娘媽生』の発行は、池田が龍山公学校を辞職する直前の一九四〇年二月のことであった。また、前述したように、豊田正子原作の映画『綴方教室』を池田はクラス全員に見せ、内地の綴方教育には関心を寄せていた。

豊田正子は一九二二年に江東地区の、物質的に恵まれないブリキ職人の家に生まれた。一九三二年、葛飾区本田小学校の担任大木顕一郎の指導のもとで書いた「うさぎ」が鈴木三重吉によって創刊された、「童話童謡創作の最初の文学運動」と銘打った月刊雑誌『赤い鳥』（第一次は一九一八年七月～一九二九年三月、第二次は一九三一年一月～一九三六年八月）に初入選、以後、計七篇が入選した。一九三七年八月、小学校時代に書いた作文は『綴方教室』にまとめられ、大木顕一郎と清水幸治共著の形で中央公論社より刊行され、日本で大きな反響を呼んだ。翌一九三八年、『綴方教室』は築地小劇場で新築地劇団によって舞台劇化され、また東宝映画の制作で映画化された。後に、豊田正子自身の手による作品『続綴方教室』、『粘土のお面』がそれぞれ一九三九年、一九四一年に中央公論社より活字化された（『続綴方教室』は一九九五年に岩波文庫版が出た）。

豊田正子の作品は、家族や家の周辺の人々の生活の「ありのままの記録」が中心である。そのなかには、うさぎをもらった際の子どもたちの喜んだ光景を無邪気に面白く仕上げた「うさぎ」のような軽快な作品もあれば、ハンダ附のような簡単な道具を下げて、各所を働きまわる裸一貫の職人の父が不況で本業の方だけでは食べられなくなって、職業紹介所の登録人夫となったほど、貧のどん底にあった、暗い家庭の生活の断面を赤裸々に描いた「自転車」や「かんぢ

よう」などのようなリアリスティックでプロレタリア的なものもある。後者の方が、むしろ豊田正子の綴方の特色とされている。『粘土のお面』あとがきにあるように、豊田正子は自らの体験の記述を通して、次第に自らをとりまく社会環境について、唯物論的な理解をするようになる。ちなみに、彼女がマルクス主義の陣営にたどりつくのは、戦後三年ほどしてからのことである。[20]

日本における児童文詩集の作製は、かなり古くから行われていたが、戦前の綴方教育の強化促進は、一九三〇年、一九三一年の頃に端を発し、一九三二年から一九三四年において絶頂に達した。文集『光』（全二三冊、ほかに詩集四冊）を出すことによって名声を馳せた木村寿は彼が一九三七年に著した『綴方の周囲』所収の「文集に就て」という一文において、当時、「綴方をやる程の人は、文集を持たなければならないといはれてゐるが、それはたしかに本統である」[21]と述べている。一九三八年になると、綴方指導者のなかで文集をもっていない人はいないといっていいほど、文集は続々出版された。[22]

こうした日本における文集作りのブームは、台湾にも広まったが、教育現場に限っていえば、特に公学校によるものが多い。だが、日本の場合と同じく、台湾においても学校文集と学級文集が中心であったため、[23]豊田正子と黄氏鳳姿のように個人文集を出すのは、当時としてはむしろ稀であったといえよう。『綴方教室』は清水幸治と大木顕一郎共著という形で発行されたが、大木顕一郎自身が認めているように豊田正子の個人文集としてみなしてよい。[24]大木顕一郎と豊田正子のケースが、池田に相当の刺激を与えたに違いないことは、西川満主宰の雑誌『文芸台湾』第二巻第一号（文芸台湾社、一九四一年三月）掲載の豊田正子と黄氏鳳姿とが交わした手紙からもうかがえるのである。つまり、鳳姿の豊田宛の手紙には、池田が教室で豊田正子の本を生徒たちに向けて読んだことが触れられている。また、豊田の鳳姿宛の手紙には、東都書籍から黄氏鳳姿の本が送られたことが言及されているほか、「私の先生からもよろしくとのことです」という挨拶の語句も見られる。[25]ちなみに、当時、綴方製作者間の「文集交換」が日本の生活綴方運動の特徴のひとつであった。

五、柳田国男民俗学からの影響

池田敏雄が柳田国男の民俗学をはじめて読んだのは、一九三四年のはじめの頃で、『創元選書』の第一冊として出たばかりの『昔話と文学』であった。グリムの「赤頭巾」や「七匹の子羊」によく似ている話が台湾（「虎姑婆―虎の老婆」）にも日本（「天道様の金の綱」や「牛方山姥」）にもあることを、その頃はじめて知ったと彼はいう。[26]池田が台湾漢民族の文化に目を向け、民話や童歌などの採集に取りかかりはじめたのは、これら柳田国男の書物との出会いがひとつの重要な契機であったに違いないことは、黄氏鳳姿の話にも裏付けられる。

柳田国男自身が体系的に論述した民俗方法論のひとつに、一九三〇年六月、伊勢神宮神学館での講述をもとにして、一九三五年八月に刀江書院によって刊行された『郷土生活の研究法』という著作がある。柳田は同書で「郷土研究の第一義」として、「手短かに言ふならば平民の過去を知ることである」と述べているが、その「平民の

過去を知る」ための具体的な調査として、柳田は「衣食住の資料と用法、年中行事から礼儀作法等、さては郷土舞謡の演奏に至るまで」の項目を挙げている。特に池田との関連で重要なのは、柳田が郷土研究と文書史料について論ずる際の提案である。柳田は、旧記証文の乏しさと不完全および文書資料の偏りのため、文書資料には超えることのできない限界があったとして、「郷土人自身の力を以て、一日も早く安心して使へるやうな精確なる採集記録を調製して、以てこの欠陥を補はしめよう」と呼びかけている。

これに呼応するかのように、池田も「台湾の慣習は台湾人自身の手で書かれる事が好ましい」[27]と述べている。先に触れた、台湾民俗の研究雑誌『民俗台湾』も、鳳姿の台湾民俗随筆も、まさにこの柳田の民俗観を具現化したものといえよう。池田の台湾民俗学の集大成ともいうべき『台湾の家庭生活』にも強く柳田民俗学の影が落ちていることは明らかである。

ここでもうひとつ見逃してならないのは、黄氏鳳姿は、「台湾の豊田正子」であると同時に「台湾の知里幸恵」ともいいうる存在であるということだ。

知里幸恵（一九〇三～一九二二）は、登別のアイヌ豪族チリパ・ハエプト翁の孫娘、父高吉と母ナミの長女として生まれた。幸恵が六歳の時、アイヌの叙事詩人の祖母のモナシノウクと一緒に暮らしていた。幸恵は、祖母によるアイヌ伝来の文化の薫陶のもと、アイヌ種族的叙事詩にたいし相当な理解と認識が培われた。なお、北海道旭川区上川第三尋常小学校、北海道旭川区上川第五尋常小学校、旭川区立上川尋常高等小学校ならびに旭川区立職業学校などで教育を受けた[28]。これがきっかけで、日本語を身に付けたばかりか、シサム（和人）に劣らないほど堪能になった。

幸恵が自らに備わるすぐれたアイヌ語と日本語の言語能力で、アイヌ文化が築いた叙事詩ユーカラを『アイヌ神謡集』（郷土研究社、一九二三年八月）としてまとめた。彼女がこの偉業をなすことができたのは、彼女を見出した、アイヌ語研究の創始者で、後に東京帝国大学教授となった金田一京助に負うところが大きい。金田一京助はアイヌ語研究のため、またアイヌの生き残る叙事詩人をさがすため、北海道に足を運んだが、これがきっかけで、幸恵に出会えたのである。後に金田一のすすめで、幸恵は独自の表記法を考え、ユーカラなどのローマ字筆記をはじめる。一九二一年四月から、幸恵は次々と「アイヌ伝説集」ノートを金田一に送り、一九二二年五月、幸恵は上京し、金田一京助宅に寄寓し、金田一のアイヌ語のインフォーマントになる[29]。他方で、知里幸恵『アイヌ神謡集』の刊行には、柳田国男のバックアップもきわめて重要である。柳田は金田一を介して、幸恵のことを知ったわけだが、これがきっかけで、『アイヌ神謡集』は柳田国男によって企画された『炉辺叢書』というシリーズの一冊として出版されるにいたったのである[30]。

このように知里幸恵は、黄氏鳳姿といろんな意味で甚だ似ている。まず、二人ともそれぞれ所属している民族の旧来の文化への認識が深いこと。また、インテリ家庭で育ち、高等教育を受け、自らの母語はもちろんのこと、植民統治者の言葉＝「国語」＝日本語が堪能である点においても共通している。そして二人は、日本植民地下の一少女として「日本人」の先生に見出された。帝国日本の植民地（ア

イヌの場合は北海道、鳳姿の場合は台湾）における文化・言語施策上のプロパガンダとなった点も、二人とも共有しているように思えるのである。こうして池田敏雄―黄氏鳳姿は、柳田国男を介して、金田一京助―知里幸恵とオーバーラップする。

おわりに

ここまで池田敏雄とのかかわりを中心に、日本統治時代の台湾人作家黄氏鳳姿の文壇デビューの経緯を振り返ってみた。以上の検討でわかるように、鳳姿のデビューは、池田の台湾民俗への関心と深くかかわっているのだが、しかし単にそれが台湾人の貴重な文化資産の保存といった評価にとどまらず、帝国日本のコロニアリズムもふくめて、いろんな側面と結びついている。池田の「国語」普及運動との関与、同化主義を骨子とする公学校の綴方教育の方針、そして公学校教師としての成果のひとつのマイルストーンとする、といった池田の思惑などがそれである。

今回は、池田の台湾の民俗への興味は柳田民俗学から触発されたものであり、知里幸恵の事例を参照にしつつ、柳田国男を介して、金田一京助―知里幸恵と、池田敏雄―黄氏鳳姿との間の影響関係を問題にしたが、示唆するにとどまった。今後、それをふまえ、オリエンタリズム＝植民地主義的視線から池田敏雄の台湾学の系譜に回収されうる、黄氏鳳姿の台湾民俗慣習のアンソロジーを検討するのも可能なのである。これは重要な課題として残されている。

他方、人脈という視点から鳳姿のデビューを語る際、池田敏雄のほかに、西川満もかなり重要な人物として挙げられる。[31] なお、人脈のほか、戦前の台湾における文学、言語政策、表象などの問題も台湾の文学少女としての鳳姿の生成に大きく関与している。これらの問題については、改めて考察することにしたい。

注

（1）黄氏鳳姿は戦後に池田敏雄と結婚し、池田鳳姿となった。

（2）菊池寛は一九四〇年一二月、日本文芸家協会主催、台湾総督府後援の『文芸銃後講演会』が台湾で開催され、吉川英治、久米正雄、中野實、火野葦平の四人とともに渡台した。一五日の夜、菊池寛は中野實とともに台北の鉄道ホテルで開催された在台作家の交歓座談会に出席し、満州、朝鮮、台湾等の「外地文学」について、在台作家と話を交わした。席上、菊池寛は黄氏鳳姿の新著『七爺八爺』『七娘媽生』を取り上げて、「台湾の豊田正子だな」と評価し、「これは面白いね、台湾の生活がうまく書けてるな、是非内地に紹介したい」と関心を寄せた（『台湾日日新報』、台湾日日新報社、一九四〇年一二月一七日付）。

（3）池田鳳姿「『七娘媽生』を書いた頃」『〈外地〉の日本語文学選』第1巻　南方・南洋／台湾』月報1、黒川創編、新宿書房、一九九六年一月、三頁。
引用は黄氏鳳姿『七娘媽生』（東都書籍株式会社台北支店、一九四〇年一一月）より。

(5) 映画『綴方教室』は一九三八年九・一〇月中、当時台湾映画興行界最大の地盤をもつ東宝映画街封切館「大世界館」で(『芸術新報』一九三八年九・一〇月号、台湾芸術新報社、四一頁)、一九三八年一〇月中、東宝映画を多数上映の「第一劇場」で(『芸術新報』一九三八年一〇月号、四七頁)上映された。

(6) 游珮芸『植民地台湾の児童文化』、明石書店、一九九九年二月、二五四頁。

(7) 台湾近現代史研究会編集部「池田敏雄年譜」『台湾近現代史研究』第四号、台湾近現代史研究会、一九八二年一〇月、一六九頁。

(8) 黄氏鳳姿「池田と台湾と私」『台湾近現代史研究』第四号、台湾近代史研究会、一九八二年一〇月、四七頁。

(9) 注(7)に同じ、一七〇頁。

(10) 池田鳳姿「『民俗台湾』創刊の背景」『沖縄文化研究16』、法政大学沖縄文化研究所紀要(16)、法政大学沖縄文化研究所、一九九〇年三月、二三頁。

(11) 池田敏雄「植民地下台湾の民俗雑誌」『民俗台湾』復刻版第五巻、台北南天書局、一九九八年二月、一六頁。

(12) 注(8)に同じ。

(13) 川平朝甫「公学校に於ける童話教育と国語の問題(二)」『児童街』第二巻第二号、台北児童芸術協会、一九四〇年四月、一頁より重引。

(14) 台南師範学校附属公学校『公学校教育の第一歩』、台湾子供世界社、一九二四年一〇月、一四一頁。

(15) 戦前、戦後を通じて日本で提唱・論議・実践された「生活綴方運動」を日本のプラグマティズムの実践運動であると定義したのは、一九五六年一一月、岩波書店刊行の『現代日本の思想』(久野収・鶴見俊輔著)である。

(16) 台北州松山公学校編纂発行『昭和十二年度　綴り方科教授細目』、一九三八年一月、九頁。

(17) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』、岩波新書、一九六五年八月、七五～七六頁。

(18) 黄氏鳳姿「〝七娘媽生〟を書いた頃」『台湾芸術』第一巻第五号、台湾芸術社、一九四〇年七月。ただし、中島利郎・河原功・下村作次郎編『日本統治期台湾文学文芸評論集』第三巻、緑蔭書房、二〇〇一年四月、三一〇頁より引用。

(19) 台湾近現代史研究会編集部「池田敏雄年譜」『台湾近現代史研究』第四号、台湾近現代史研究会、一九八二年一〇月、一七〇頁。

(20) 注(17)に同じ、九一、九五頁。

(21) 木村寿「文集に就て」『綴方の周囲』、一九三七年。ただし、野地潤家編『作文・綴り方教育史資料(下)』、桜楓社、一九七二年三月、三二二頁より引用。

(22) 林義男「綴方指導の根幹としての文集」『綴方教程』、百田宗治編、厚生閣、一九三八年六月、四六三頁。

(23) 注(6)に同じ、二九二～二九三頁。

(24) 大木顕一郎「前篇に就いて」『綴方教室』、大木顕一郎・清水幸治著、中央公論社、一九三八年一〇月、一頁。

(25)「豊田正子から黄氏鳳姿へ」「黄氏鳳姿から豊田正子へ」『文芸台湾』第七号、西川満編、文芸台湾社、一九四一年三月、九三頁。

(26)台湾近現代史研究会編集部「池田敏雄「植民地下台湾の民俗雑誌」付記」『台湾近現代史研究』第四号、台湾近現代史研究会、一九八二年一〇月、一四六頁。

(27)注(3)に同じ。

(28)中井三好『知里幸恵――十九歳の遺言』、彩流社、一九九一年五月、六～八、一七頁。

(29)金田一京助「故知里幸恵さんの追憶」『北の人』、梓書房、一九三四年五月、一〇四頁。

(30)注(29)に同じ、一〇三頁。

(31)拙稿「「台湾の文学少女」黄氏鳳姿の生成をめぐって――西川満の出版戦略を軸として――」(『日本近代文学会北海道支部会報』10、二〇〇七年五月)を参照されたい。

(りゅう　しゅくじょ・南台科技大学助理教授)